

Title	チベリウス帝政論攷
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.29(207)- 54(232)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0029">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0029</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# チベリウス帝政論攷

近山金次

アウグスツス Augustus 帝が大ローマの統一を完成した後を承繼いで立つた皇帝達、即ちチベリウス Tiberius、カリグラ Caligula、クラウヂウス Claudius、ネロ Nero 等は何れも暴戾悪逆な皇帝であつたと言はれて居る。ところが此在來の定説に就て最近一部の史家は非常な疑惑を挟む様になり、とりわけチベリウス帝の是非に關しては最も論争を生んだのである。例へば最も昨今の例を引くと、去年の Cambridge Historical Journal (IV, 2) にもチャールズワース P. Charlesworth なる人が The Tradition about Caligula といふ論文をのせ、スエトニウス Suetonius、ヂオン・カシウス Dion Cassius に從へば此皇帝は一人の暴君に過ぎぬが、最近発見された碑銘によればその批評は苛酷に過ぎたるものの様であると述べてゐる。又二年前、イギリスのマーシユ Frank Burr Marsh は The reign of Tiberius なる一書をもつし、タキツス Tacitus の資料を尋ね、ケスラー Kessler の所説を引き、タキツス、スエトニウス、ヂオン・カシウスの史的價値を論じ、チベリウス帝政の是非を詳細に互つて検討したのである。彼の説に從へばチベリウスの治世はアウグスツスの共和的立憲的君主國からカリグラ、ネロ、ドミチヤヌス Domitianus の暴君的王國への過渡期であり、アウグスツス帝の死によつて「ローマ帝國の歴史は新時代に入る」と云ふのである。然し此説はジユール・ツータン Jules Toutain も言ふ如く、少し極端に走り過ぎてゐる様である。事實上、アウグスツスの政治は君主がその手に國家の全權を握る王政であり、ローマ傳統の共和政治が確固たる君主政治に變遷して行く長い過程の重要な一部でこそあれ、これを以て一つの時代を區切ると云ふことは甚だ温當を缺くのである。しかしながらマーシユは廿三年間に亙るチベリウスの治世を明確に論

述し、皇帝の元老院に對する政策、財政、植民地行政、或はまたゲルマニクス Germanicus の死、セーヤヌス Sejanus の陰謀、推定相續者の指名等に關する重大問題に立入つて考證し、結局チベリウスに對する暴政亂行の非難はそのまま受入れることが出来ない、彼はタキツスの描いた様な怪物では無かつた、彼の性格には同情を有てない節もあるし、その虚偽な振舞には偽善者の様な所もあり、また密告者を使喚して有害不吉な取締をやつたけれども、然もなほチベリウスは勇敢な軍人であり、注意深い巧者な政治家であり、正義人道に基く地方政治を要望し且つ達成した人物であると云ふことを力説したのである。「かくあるがままにチベリウスを見れば、ローマの元老院と民衆の眼は知らず、チベリウスが最も善良な且つ最も偉大な皇帝の一人たることを否定することは實に不可能とまで言はずとも誠に困難な話である」と結んでゐる (Revue Historique, Tome CXXXII, 3)。抑、このチベリウス冤罪論なるものは決して目新しいものでは無く、少くとも半世紀以上の歴史を有つてゐるのである。最初にこの事を最も大膽に主張したのは有名なナポレオン一世 Napoleon I その人であつた。彼はローマ諸皇帝に對するタキツスの非難が温當を缺くことを説き「余は彼の如く人類を誹謗し輕蔑した歴史家を他に見ない。彼は極めて簡単な行動に就ても何かしら罪惡の動機を求めぬ。彼は何れの皇帝をも完全な惡漢に仕立てて、その様に描寫して行くのであるから、吾人はただその人物に透徹する惡の精神を嗟歎するだけである。彼の Annales は帝國の歴史にあらず、實にローマ刑事裁判所の歴史であるとは誠に至言である。訴訟とその被告、迫害とその被害者、湯槽で血管を切斷する人々の他には何も無い。彼は絶えず非難告發の話をする。而も最大の誹謗者は實に彼自身である」と言つてゐる (Frölich: Napoleon I, und seine Beziehungen zum Klassischen Altertum, 1882)。ローマ史研究の先驅者ニープール Niebuhr はナポレオンの此説を引用し、「ナポレオンはもとより學究の徒では無いが、ローマ史に精通じてゐたものの如く思はれる」と述べて、この粗雑な極言の中に否定することの出來ぬ一脈の眞理があることを裏書きして居る (Lectures on History of Rome, LXI, 1844)。またトーン・メリウヰル Dem Merivale はその著 History of the Romans under the Empire (1856) に於てチベリウスの史料批判を行ひ、ヴェレイウス・パテルグルス Velleius Paternulus、ウマレリウス・マクシムス Valerius Maximus の讚辭から、セネカ Seneca (Ep. 21; de Benet. III, 26; Consol. ad Marc. 15)、ノッロー Philo, m

ヤヌス Josephus (Antiq. Jud. XVIII, 6-9) の穩健論を経て、タキツス、スエトニウスの極論に至るまでの變遷を説き、最後の二者を生んだ時代は如何にケーザル Caesar の専制政治に反抗する空氣が濃厚であつたかを記憶せねばならぬと言つてゐる。彼は更にタキツス自身の言葉を引用し、彼が如何に誤解されてゐるかを物語り、此處にチベリウスの謎を提出して居るのである (Chap. XLVI)。この他、ヴィクトル・ヂュルイ Victor Duruy (Histoire Romaine) も、ムーズリー Beesly (Outline, Claudius and Tiberius; Fortnightly Review, Dec. 1867—Jan. 1868) も、ストバート Stobart (The Grandeur that was Rome) も、同じ又最近ではローマ史家の殆んど全部が多少の疑問を其處に残す様になつた。事實も逸話も傳説も口碑も區別なく並べ立てて茫大なローマ史を書いた彼のヂオン・カシウスもチベリウスの最後を物語つて後「かくて幾多の善と惡とを兼ね備へたチベリウスはその兩面を宛かも他面の無きが如く次々に見せ、かくの如くして三月廿六日、終に此世をば去れり」と謎の様な言葉を殘してゐる (LVIII, 28)。筆者もたまたま此謎に直面して此處に一應の觀察を行つて見たいと思ふのである。

傳によればチベリウス・クラウヂウス・ネロ Tiberius Claudius Nero は 42 B. C. の十一月十六日にローマで生れた。丁度それは共和政治の復活を仰望せるローマの貴族達がオクタヴィヤヌス Octavianus とアントニウス Antonius を相手にフィリッピ Philippi で戦つてゐた時であつた (Suet. Tib., V)。父のクラウヂウス・ネロ Claudius Nero も母のリヴィヤ Livia も立派な由緒ある家柄の出であつた (ib., I-III)。彼の父は曾てケーザル軍團の名將であり、後にはアントニウスと共にオクタヴィヤヌスに拮抗した爲にチベリウスはその母リヴィヤの手に抱かれて各地を流浪せねばならなかつた (ib., V; V. Patere, II, 75)。39 B. C. の特赦によつて彼等はローマに歸つた。その翌年オクタヴィヤヌスはローマの Pontifices に向つ

て妊娠中の女がその子供の生れぬ中に他の男と結婚し得るや否やを確かめ、その許可を得てこのリヴィヤをその夫クラウヂウス・ネロからもらひ受けた。結婚後三ヶ月にして彼女はチベリウスの弟ドルスス Drusus を生んだのである (Tac. Ann., I, 10; Suet. Aug., LXII, V. Patere, II, 79)。現代の吾々にとつて斯うした結婚の風習は極めて野蠻な破廉恥な且つ奇妙なものにさへ見えるのであるが、當時に於て斯うした交換取引に忍従した婦人と云ふものは決して輕薄なものでも不道德なものでも無く、又これを見たローマ人も決して疑懼を抱く様なことが無かつたのである。ローマ貴族の結婚と云ふものは多くの場合、全く一つの政治的行爲であるか或は少くとも經濟的行爲であつて、一旦斯うした家柄本位の大きな目的に否み難い個人的愛情が絡み合ふと幾つかの悲劇を醸しもし、又一見不道德と思はれがちな歴史が生れて來ると云ふことは何等怪しむに足らぬのである。ローマ史に於て「彼は如何なる家柄に生れ、又如何なる女と結婚したか」が最も重大な問題として取扱はれてゐるのは實にこれが爲である。換言すれば彼等の結婚は全く理智的であつた。然しながら理智も亦感情の如く弱さを有つものであり、ローマ人の抱いてゐた斯くの如き結婚感幾多の悲しむべき結果を生んだのであつて、吾人はローマ史を研究する上に於て、とりわけ諸皇帝の悲劇を理解せんがために此事實を念頭に置いておく必要がある。それから更に又これに附隨して記憶すべきことは、當時のローマ婦人の社會的地位と云ふものがコルネリウス・ネポス Cornelius Nepos も語る如くギリシヤのそれに較べて遙かに高いことである。彼等は最早や單なる手間

仕事の處理者にあらず、その夫と共に家庭の凡ゆる義務を負担し實質的の家長であつたに止まらず、第二ポエニ戰役後の度重なる戰爭内亂は夫の長い間の不在と死傷の結果から彼等をして社會的政治的にも活動せしめる様になり、彼等は威嚴と勤勉と實際的智識とを以て次第にその獨立と富と地位とをかち得ることになつた。斯うした變遷は 195 B. C. に於ける Lex Oppia の廢止 (Livius, XXXIV) 186 B. C. に於ける Senatus consultum de Bacchanalibus (ib., XXXIX) 169 B. C. に於ける Lex Voconia の成立 (Gellius, Noct. Att., VI, 13) 其他幾多の離婚事件、傷害事件 (Plutarch: Aem. Pauli, 5; ib.: Cato min., 25, 52; Cicero: Ad Fam., VIII, 7; Livius, XI, 37; ib.: Ep., 48) を通じて明瞭にうかがへるのである。斯かる社會にあつて早婚は幾多の破局を孕み、政策的見地から離婚は一層容易となり、婦人は家庭に於て夫と同等の名譽及び權力を有するも、その將來に至つては全く不安そのものであり、夫の愛情も貞淑な生活も子供の有る無しも、家名の要求、父親の命令の前には風塵に等しく、一本の手紙はゆうに一つの結婚生活を解消させることが出来たのである。斯うした環境に置かれた婦人が家庭生活の基礎である嚴肅な道德感を次第に失つて行くこと云ふことは當然の話であつた。かかる傾向はケーザル時代に及んで政治的政策そのものが變化し紛糾して來るに従ひ、男性の側に於ける結婚廻避の傾向と相俟つて (Gellius, I, 6; Livius, Epit., 59) いよいよ社會的紛亂、道德的頹廢を醸すべき事情を生んだのであつた (cf. W. Warde Fowler: Social Life at Rome in the Age of Cicero, chap. V, 1908)。ローマ傳統の純潔な思想と斯うした環境との間に必然的に生れた矛盾こそ少くと

もローマ社會史の一面を繕いてくれる鍵であらうと思はれるのである。敍上の様な事情からリヴィアの再婚もその當時として決して輕薄、醉興の振舞ひでは無く最もローマ的な而も眞面目な宿命的なものであつた。ただ問題となるのはその結婚がドルススの出生を待つ暇も無く、餘りに急速に行はれた云ふことである。ジュリエルモ・フェンロ Guglielmo Ferrero はその著 *The Greatness and Decline of Rome* (III, chap. 15, 1907) に於て、この原因を政治的動機に求めず、オクタヴィヤヌスの情愛に歸して居るが、後に出版された *The women of the Caesars* (chap. I, 1911) では矢張り政治的動機によつて説明すべきものであると説いて居る。即ち名門の出である競争者アントニウスに拮抗するため、新參者のオクタヴィヤヌスは名家の系統をひくりヴィヤを熱望し、他方、老クラウヂウス・ネロは己の代表する貴族階級全般の利益を慮つてこの將來ある若者を一黨に引入れんと決意したのであり、動亂不安の渦中にあつた當時としては此の有力な結合を一日も早く達成させる必要があつたのだと云ふのである。この見方からすれば少くともこの結婚は結果に於て非常な成功であつたと言はねばならぬ。かくて間も無くクラウヂウス・ネロの死によりチベリウス、ドルススの兄弟はリヴィアの許に引取られると云ふことになつた。青年に達したチベリウスは先づ十九歳にして *questor* となり (V. Patere, II, 94)、更に十年後には *Consul* となり (Des Gestae Divi Augusti, 12)、此間、或は東方諸國に、或は北方 Germani に (弟ドルススと共に) 轉戦してローマの武威を發揚した (V. Patere, II, 94—95)。政治的にもファンニウス・ケピオ *Fannius Caepio* の陰

謀をあばき、穀物供給の統制、奴隷矯正所 (Ergastulum) の取締につとめたりした (Suet. Tib., VIII-IX)。彼はまたマルクス・アグリッパ Marcus Agrippa の娘アグリッピナ・ウィプサニヤ Agrippina Vipsania と結婚して一子ドルスス Drusus をもうけ、其生活は内外共に極めて幸福なものであつた様である。ところが此處に一つの思はぬ事件が発生して此明るい前半生に比し極めて悲劇的な後半生が展開すると云ふ事情に立至つたのである。これ即ち 12 B. C. に於けるユリヤ Julia との結婚であつた。

アウグスツスとリヴィヤとの間には子供が無かつたのであるが、アウグスツスはその先妻スクリボニヤ Scribonia との間に一人の娘ユリヤ (b. 39 B. C.) を生んでゐた。ユリヤは初め従兄にあたるマルクス・マルケルス Marcus Marcellus (b. 43 B. C. オクタヴィヤ Octavia の子) と結婚した (25 B. C.)。マルクス・マルケルスは當時、名將マルクス・アグリッパ (b. 63 B. C.) と並んでローマ最大の勢力家であつた (Suet. Tib., X)。ところが結婚後二年にしてマルクス・マルケルスが死んだのでユリヤは政略上から直ちにマルクス・アグリッパと結婚することになつた。マルクス・アグリッパは妻のポンポニヤ Pomponia (彼女との間にアグリッピナを生み、この女がチベリウスと結婚してゐたのである) を離別してユリヤを迎へたのである。ユリヤとアグリッパとの生活は十年間つづいて (カイウス・ケーザル Caius Caesar, ルキウス・ケーザル Lucius Caesar, ユリヤ Julia, アグリッピナ Agrippina, アグリッパ Agrippa の諸子生る) 12 B. C. にアグリッパが死ぬと再びユリヤの結婚問題が起り、此處に選ばれたのがチベリウスであつた。



アウグスツスの血をひく唯一の娘ユリヤの爲に、チペリウスは生木を裂かれる様に愛妻のアグリッピナと離婚させられて終つた。彼が妻のアグリッピナを非常に愛してゐたと云ふことは當時の史家が何れも物語つて居る所であり、先妻の愛着を忘れ兼ねてゐたチペリウスが或日たまたま彼女の姿を見て悲しみに耐えず、滿眼の涙を堪へたと云ふ哀れな記録さへ残してゐるのである。派手好きなユリヤの性格と氷炭相容れぬ性質のチペリウスは日ならずして之と別居生活を営み、或は遠征に故郷を離れる等、悶々の中に日を過すと云ふことになつた (Ib., VII; V. Patere, II, 96)。若しユリヤとの結婚が無かつたならばチペリウス皇帝は生れなかつたかもしれない。然し彼はもつと幸福に、ローマの有力な一貴族として恐らくその生涯を結んだことであらう。しかし其は當時のローマの傳統、リヴィヤを中心とせる社會が到底許さぬ所であつた。さてその Germani 遠征の折、9 B. C. 彼は最愛の弟ドルススを失ひ (cf. Suet. Tib., XX)。その遺骸を護つてローマに歸つた (Suet. Tib., VII; V. Patere, II, 97)。突如 6 B. C. 彼は引退を聲明して一同を驚かした。理由は (一) 妻ユリヤの亂行にたまりかねたこと、(二) ローマ市民に自己の價値を知らしめんがため、(三) アウグスツスの二人の孫 (カイウス・ケーザル、ルキウス・ケーザル) が成長して、單なる養子に過ぎなかつた彼の位置は次第に意味を失へること、又 (四) 彼の存在が徒らに前二者の障礙となるべき事情にあつたこと、等種々に想像されて居るが、チペリウス自身が言明したと云はれてゐるのは最後のもののみで而も其は後日に物語られたものであり、ローマを離れる時は一途、生活の倦怠と心身の靜養

を口實にして居たのである。この決心は極めて堅確で母リヴィアの切なる歎願も、アウグスツスの大きな悲歎も全く顧みず、急遽ローマを棄ててロードス Rhodus 島へ渡つた。理由は何れにてもあれ、當時彼が全くローマそのものに何等の魅力をも失つてゐたことは事實で、その空氣に堪え難かつたのだと云ふことは充分に推察し得るのである (Suet. Tib., X—XI; V. Patere, II, 99)。アウグスツスが決して心からチベリウスを愛してゐなかつた事情から見て、若い人々のために道を譲つたと云ふ言葉の中には一面の眞理があり、アグリッパとマルケルスの場合にもそんな前例があるにはあるが、ユリヤを中心としてアウグスツスとチベリウスの間に重苦しい感情の疏隔が深められたと云ふ事情は容易に之を推測し得るのである。兎も角、この行動はチベリウスの強烈な性格の一端を示すものとして特に記憶すべき事柄であらうかと考へる。さてこのユリヤは 2 B. C. に Lex de adulteriis に觸れ、アウグスツスの命によつて正式に離婚されることとなり、パンダテリヤ Pandateria の島に遠流の身となつた。一見、偽善者の如きチベリウスの態度はこの場合に於ても無益な威嚴と自尊に充ちたものであり、遙かにロードス島からユリヤのために取なして、その罪の軽減につとめると云ふ有様であつた (Suet. Tib., XI; V. Patere, II, 100; Tac. Ann., I, 53)。さて他方、カイウスやルキウスの立場も充分に確立されたと云ふ事情からチベリウスも歸心大いに動き、歸國の希望を述べたのであるがアウグスツスの許可が下りず、なほ二年間の蟄居をつづけ A. D. 2 に至り漸く歸國を許された (Suet. Tib., XII—XIV; V. Patere, II, 103)。公的生活を絶つと云ふ約束で

あつたのが、此處にまた豫期せざる不幸が起つてチベリウスを再び公職につけることとなつた。これ即ち A. D. 2 に於けるルキウスの死であり、A. D. 4 に於けるカイウスの死である。かくて A. D. 4 ロードスから歸つたチベリウスは六月廿七日 *Tribunus* となり公的生活へ復歸すると同時に正當の帝位相續者に決定されたのである。時に年齢四十五歳であつた (Suet. Tib., XV—XVI; V. Patere, II, 102—103)。折しも北方國境には再び戦雲が渦巻き、チベリウスは此處にローマ軍を率ゐて遠征することとなり、A. D. 12 ローマに凱旋するまで或はゲルマニヤ *Germania* に、或はダルマチヤ *Dalmatia* に、或はパンノニヤ *Pannonia* に轉戦し、國防に努むること頗る大なるものがあつた (V. Patere, II, 104—121; Suet. Tib., XVI—XX)。當時の *Consules* は爾來アウグスツスと共にチベリウスが地方行政に協力し、*Census* を行ふべきことを規定した位である (Suet. Tib., XXI)。しかるに A. D. 14 にアウグスツスが此世を去ると其後繼者に就て新に輿論の沸騰を見た。これ他にあらず、チベリウスの不評判に由來するものである。元來チベリウスは偉大な武將であつたけれども、その峻嚴な性格からドルススの有つ溫雅を缺き、従つて多數の敵を作り、その數は増加する一方であつた。當時ローマの若い貴族は安易になれ逸樂に耽つてオヴィヂウス *Ovidius* の詩歌に酔ひ、優柔な生活を送つてゐたのであるが、22—6 B. C., A. D. 4—12 と若い頃より殆んど野營の陣中生活をしたチベリウスは一層謹嚴なるローマ精神を培ひ、昔ながらの理想、習慣を重んじ、絶えず押寄せる蠻族の襲來を監視してゐたのである。帝國軍團の將來を憂ふる熱烈な一武將としてのチ

ベリウスは澎湃たるギリシヤ文明の潮流の眞唯中にありながら、ローマ傳統の嚴肅な理念と習慣と感情とを墨守してゐた(Suet. Tib., XXVI—XXVIII)。當時、元老院では最も重大な議事の場合にもギリシヤ語を用ひ、彼も亦ギリシヤ語に通じてゐたのであるが、彼は決してそれを用ひようとはしなかつた。彼がギリシヤ語を嫌つたのは有名な話である(ib., LXXI)。またギリシヤ渡來の醫學よりも、ローマ傳統の解釋に基いてその健康を保持してゐたと言はれてゐる(ib., LXVIII)。質素儉約を重んじた彼は他方に於てローマ古來の精神から 27 B. C. の法律を好まず、金錢等によつて部下將卒の勇氣を鼓舞しようとはしなかつた(ib., XLVI)。また頽廢と柔弱を將來する奢侈を忌み嫌つたことも有名である(Tac. Ann., III, 52)。土木事業を避け、お祭騒ぎや見世物を好まず、貴族への私的補助を拒けて國費の節減に努めた(Suet. Tib., XLVII)。Lex sumptuaria, Lex de adulteris を嚴守すると同時に Lex de maritandis ordinibus の勵行につとめた。峻嚴な傳統を守つて一見苛酷にさへ見える強制的施行は無比の將軍を作ると同時に、いよいよ不評判の政治家をこさへた。更にその傾向を鞭つものにチベリウスの風豊があつた。一見横柄な人づきの悪い態度は屢々人々の反感をかつたのであり、アウグスツスはそれが決して悪意からのもので無いと云ふことを度々チベリウスのために釋明した程である(ib., LXVIII)。

A. D. 14 アウグスツスが死亡するとチベリウスは五十六歳にして帝位に登つた。元老院を輕蔑し、ローマの民衆を嫌惡して一般の不評をかひ、生死を共にした部下からも裏切られがちであつたチベリウス

は廣大な帝國の遺産を前にして全く自信を失ひ、登位を逡巡忌避したことは有名な話である (Tac. Ann., I, 11—13; Suet. Tib., XXIV)。然しながら其希望が何うであれ、兎も角、當時の情勢から推して、チベリウスを他にしては帝位を繼ぐべき人物がゐなかつたことは事實である。かくて彼は「老ひたるものに安息を與ふべしと思はるる日が來るまで」(Dum veniam ad id tempus, quo vobis aequum possit videri dare vos aliquam se-  
nectuti meae requiem.—Suet. Tib., XXIV)の意を述べて其帝位につくこととなつた。チベリウスが登位して間もなく第一にした仕事は magistratus の選出を Campus Martius から Senatus へ、即ち民衆の手から貴族の手へ移したことであつた (Tac. Ann., I, 15)。この改革を皮切りにチベリウスの民衆に對する反動政策の展開を見ることが出来るのである。さてチベリウスの實子ドルススと (アウグスツスの長逝當時ガリヤにゐた) 養子ゲルマニクスとは、それぞれパンノニヤ及びガリヤの謀叛せる軍隊を鎮壓して蠻族の侵入に備へしめると云ふことになつた (Ib., I, 16—45; Suet. Tib., XXV)。然しながら、この謀叛はチベリウスに對する反感から起つたと云ふよりも、長年の戰禍に倦んだ兵士等が對遇改善を標榜して立つたものであり、従つてドルスス、ゲルマニクスは屢々危機に見舞はれ、他方、ローマの人々もこの報知を受けて驚愕し、是等若輩二名の未熟な權威 (duorum adolescentium nondum adulta auctoritate) にたより得ず、チベリウスの出馬を希望した程である (Tac. Ann., I, 46)。兎も角、謀叛も平定して更に引續き A. D. 15 にはゲルマニクスのゲルマニヤ討征となるのであるが、ゲルマニクスが武功を擧げる毎に、チベリウスとゲルマニクス

との間にはセーヤヌス一派の離間策動が行はれ、そのセーヤヌス以外に寵臣を有たなかつたチベリウスは不幸にも屢々不快な報道を耳にしなければならなかつたのである (Ib., I, 52, 62, 69)。又一方に於てチベリウスは彼の殘酷、豪慢、母との不和を諷刺する落首の流行に憤激して *Lex majestatis* を復活する決心をし、早速三名のものが之によつて處罰せられると云ふことになつた (Ib., I, 72-74)。當時、民衆が一分率の販賣稅撤廢を要求したのに對し、チベリウスは軍費の不足を説いて之を拒絶した事實も見えるのである (Ib., I, 78)。チベリウスの登位以來、軍事的にも政治的にも貴族的色彩が非常に強くなつて民衆の自由が次第に掣肘されて行く傾向を否定することは出来ないだらうと思ふ (cf. Ib., I, 80)。登位より第三年目、即ち A. D. 16 になるとチベリウスは終にゲルマニクスに對し歸國の命令を與へた (Ib., II, 26)。これを以て直にゲルマニクスへの嫉妬の結果であると斷するのは極めて惡意に充ちた解釋であらうかと考へる。抑、ローマのゲルマニヤ政策なるものは A. D. 9 に於けるキンチリウス・ヴァルス S. Quintilius Varus の慘死以來 (V. Patere, II, 117-120; Suet., Tib., XVIII-XIX)、重夫な變革を來しアルピス *Albis* 國境策を放棄してレーヌス *Rhenus* を國境とする政策、即ちゲルマニヤ放棄の政策を取るの餘儀なきに至つたのであり、アウグスツス帝もその遺言に於て *Consilium coercendi intra terminos imperii* (帝國國境を現在のままに制限する策) を説いてゐるのである (Tac. Ann., I, 11)。あまつさへゲルマニクスの遠征はその名聲の如何にあれ、結果から見て明かに完全な失敗であつた。ローマはそれによつて何一つ得る所が

無かつたのである。ただ其によつて矢張りゲルマニヤを放棄しレーヌスを國境とする策が最も賢明であると云ふことを確かめ得たのみであつた。折しも東方に於てアルメニヤ Armenia が擾亂の渦中にあつた(3b, 4)。ゲルマニクスを此處に派遣し、活用したかつたチベリウスが、ローマ遠征軍の難波による大損害を機として彼を召還したことは當然の理由があつたと見なければならぬのである。Satis iam eventum, satis casum. Prospera illi et magna droelia : eorum quoque meminisset, quae venti et fluctus, nulla ducis culpa, gravia tamen et saeva dsamna intulissent. Senovias a divo Augusto in Germaniam missum plura consilio quam vi perfecisse : sic Sugambros in deditiõndm acceptos, sic Suebos regemque Marobodum pace obstrictum. Posse es Cheruseos ceterasque rebellium gentis, quoniam Romanae ultioni consultum esset, internis discordiis relinqui—Tac. Ann., II, 26 (既に幾度か喜ばしい報知を聞き、又慘ましい事件も度々あつた。偉大な美事な勝戦も數々あつたが、風雨による慘害も亦記憶せねばならぬ。この災害は何等將帥の責任で無かつたが、そは重大な如何にも慘めなものであつた。チベリウスはアウグストスのため前後九回にわたつてゲルマニヤに赴いたが、武力よりも寧ろ政策によつて事を行つた。かくて Sugambri は降伏し、Suebi とその王 Marobodus は平定されたのである。Cherusci 其他の謀叛部族に對するローマの復讐も成就された今日、よろしく彼等をその内訌の赴くがままに放棄するがよろしからう)と云ふチベリウスのゲルマニクスに對する手紙は、空虚な勝利を求むる徒らな征戦をたしな

め、ローマ傳統の對外政策を諄々と説いた極めて立派な意見であり、當時の狀勢から推して、この場合に於けるチベリウスの態度には些かの非難すべき點も認められないのである。かくて A. D. 17 の五月廿六日、ローマに凱旋したゲルマニクスは破格の權威を付與せられて再び東方遠征の旅に上ると云ふことになつた (The Ann., II, 43)。ところが此處にチベリウスは不幸にも最初の失策を犯してその政治的生涯に陰影を醸すと云ふ事情に立到つたのである。それはシリヤ Syria の rector であつたクレチクス・シラヌス Creteus Silanus を召還して、その代りにクネイウス・ピソー Cneius Piso を同地に派遣したことである (cf. Suet. Calig., II)。ピソーはタキッスも記す如く ingenio violentum et obsequii ignarum, insita ferocia a patre (服従を知らぬ狂暴な性質で親讓りの傲慢な) 男であつた。榮譽利達を離れた峻嚴な性格の人で、實力もあり、決して惡辣な人では無かつた様であるが、かかる有力な人物をその富貴にして才智に溢れた妻プランキヤ Plancia と共にシリヤに派遣し、ゲルマニクスの配下に置いたと云ふことは確かに重大な過失であつたと見なければならぬ。Vix Tiberio concedere, liberos eius ut multum infra despectare (チベリウスに優るとも劣らず、チベリウスの子供等を遙かに見下してゐた) と云はれる此の人物をシリヤに派遣し、必然的にゲルマニクスと拮抗させた原因は何うしてもセーヤヌス一派の陰謀とリヴィヤの政策に求むるより他無からうかと思はれるのであり (Ib., II, 43)。チベリウスとしては此の場合ただ auctore senatu (Senatus の勸告に) 従つたまでの話であつた (Ib., III, 12)。ただ何れの人々も恐ら



くその紛争が後にあれほどまで慘ましい大きな結果を將來するとは夢想だにせず、若いゲルマニクスの行動に或程度の掣肘を加へると云ふのが其目的であつたのだと推察される。これと同じ頃、ドルススも *ut susceperet militiae studiaque exercitus pararet* (軍事を習得し兵士の好感をかふ) と云ふ目的からイリクム *Illyricum* に派遣された。當時に於けるチベリウスの政治は内外に互つて極めて建設的であり、奢侈を壓へ、國庫を充實して綱紀肅正を圖り、或は巨額の金を投じて震災に崩れた地方を救済するなど、タキツスの悪意を以てすら之を諷刺し兼ねるものがあるのである。さて A. D. 18 を迎へゲルマニクスとピソーとの間は感情的にも (ib. H. 57)、政策的にも (ib. H. 58) 完全に衝突を來すことになり、これに堪え兼ねたゲルマニクスは A. D. 19 その憤懣をエジプト旅行に消すと云ふことになつた。ところが此の行動が全く別な思ひもかけぬ見地からチベリウスの不快をかふと云ふゲルマニクスにとつては誠に氣の毒な事情に立到つたのである。それはエジプトが當時、ローマの穀倉であつたと云ふ理由から、ローマの有力な貴族は許可なくして同地に赴くことを禁せられてゐたからであつた。このアウグスツスの規定に背いてアレクサンドリヤ *Alexandria* を訪問した行動が傳統を重んずるチベリウスをして少からず不快ならしめたことは想像に難くない (ib. H. 59)。然しながらゲルマニクスの中に少しの邪念も無かつたことはゲルマニクスのその後の行動に於て明白に證明されることであるので (ib. H. 60—61)、この事は別に大した問題ともならず済んだのである。さてゲルマニクスがエジプトから歸つて見ると事態は一

變して居り、彼が都市及び軍隊に與へて置いた命令は何れもピソーの策動によつて覆されて居ると云ふ状態であつた。此處にゲルマニクスはピソーを難詰し、ピソーもゲルマニクスを誹謗して一時シリヤを離れることになつたのであるが、折しもゲルマニクスは病を得て同地に永眠すると云ふことになつた。ゲルマニクスとしては如何にも無念な最後であり、その死に就ては毒殺の流言さへ出たのであるが、それに就ては何等適確な根據があるわけでも無く、ピソーの人物及びその後の行動から推しても其の流言には可能性が無いのである。しかしながら特命を帯びて東方に派遣されたゲルマニクスの配下において、全くゲルマニクスの存在を無視したピソーの行動は明かに一種の大逆罪であり、ゲルマニクスにローマ歸還を命ぜられた身でありながらゲルマニクスの死後シリヤに活躍せんとした其の行爲は疑も無く *Lex majestatis* に觸るるものがあつたと見なければならぬ (*Ib.*, II, 69—81)。ゲルマニクスの哀れな病死はピソーに對する反感と共にローマ市民の心を動搖させてゐた折柄、ドルススの妻が双生兒を産み、チベリウスが之を非常に喜んだのに對しローマ市民は益々反感を覺えると云ふ様なわけで、チベリウスの人望は日に日にその影を薄めて行つた (*Ib.*, II, 81—84)。然しながらチベリウスは依然、周到綿密なる注意を以て内外の政局にあたり、ローマ高貴の女性が姦通罪を逃れんがため淫賣婦に身を落すことを禁止して風紀を取締り、或は穀物の値段を一定して一般生活の安定を圖るなど内治に見るべきものがあり、タキツス自身の記す如く少くとも *Florentissimum imperium* (帝國の全盛時代)の一端を現出したのである。

つた (ib., II, 85—88)。ところが翌 A. D. 20 になつてゲルマニクスの妻アグリッピナ Agrippina が夫の遺骨を抱いてブルンデシウム Brundisium に上陸すると、ローマの市民はその哀れな女の姿を見て再び深い哀惜の念に包まれ、他方 principes mortales, rem publicam aeternam esse (將は死すとも國家は永續す) と云ふチベリウスの冷靜な態度は一層の反感を醸してゐた折しも、問題の人物クネイウス・ピンソーがローマに歸つて來たのである (ib., III, 1—9)。彼は直ちに毒殺の嫌疑で裁判に問はれることになつた。根據無き流言蜚語を駁して公平無私な裁判の必要を特に強調したチベリウスの辯論は囂々たる輿論の沸騰を招き、ピンソーは毒殺の嫌疑をころまぬがれたものの、他は辯駁の餘地も無く、終に自殺して此の世を去ると云ふ慘ましい結果に及んだのであつた (ib., III, 12—16)。この場合にもチベリウスは飽くまで冷靜であり、一般民衆の反感をかつたけれども、他に何等の私心も無かつたことは前後の事情からして明白であり、特に之より數日後、ピンソーの攻撃者等に對し其の勞を犒ふと同時に今や私怨を棄てて天下の公道に入るべきを奨め、その將來を約束してゐる事實からも充分これを推察することが出来るのである (ib., III, 16)。しかしながら此の慘ましい事件によつてチベリウスと一般民衆との間に穿たれた宿命的な溝は一層深いものがあつた。さてこのチベリウスの晴れやらぬ心に更に一つの哀しい報知が訪れたのである。それはチベリウスが此の世に於て得た唯一の女性アグリッピナ・ヴィプサニヤの死亡であつた (ib., III, 19)。チベリウスとその子ドルススとに生別れたヴィプサニヤはその後、アシニウス・ガルス Asinius Gallus

の許に嫁いだのであるが、チベリウスが彼女に對する愛情を忘れ兼ねてゐたことは前述の如く當時有名な話であつた。この頃、チベリウスが斯うした種々な事情からローマに嫌惡を覺える様になつたことは決して想像に難くないのである。それは兎も角、翌 A. D. 21 に入るとチベリウスは直ちに心身の靜養を名としてローマを離れ、カンパニヤ Campania へ隱棲することになつた (ib. III, 31)。峻嚴な、どちらかと云へば陰鬱なチベリウスに比して放蕩息子のドルススは當時、幸ひローマ人の間に評判がよかつた (ib. III, 37)。ところが此處に地方政治は再び亂れて、トラキヤ Thracia, ガリヤ Gallia に暴動が起り、この報道が誇大されてローマに傳へられた爲に、極度に人心の沸騰を見たのであるけれども、チベリウスは之に對して全く冷靜を装ひ (ib. III, 44)、またローマ歸還を懇望されたにかかはらず、簡單に之を拒けてしまつた (ib. III, 45)。チベリウスが當時の輕佻浮薄なローマに對する感情の疎隔、幾分諦觀的な放心の態度はマルクス・レピダス Marcus Lepidus 事件 (ib. III, 49—51) や奢侈取締法 (ib. III, 52—54) に於ても、その一端を窺ふことが出来るのである。A. D. 22 に入るとドルススは漸く人望を貶し (ib. III, 59)、此處に帝國の將來は暗雲に包まれることになつたのであるが、此頃リヴィヤが病床に臥し、チベリウスは一時ローマに歸らねばならなくなつた (ib. III, 64)。しかしながらローマは、そしてとりわけ元老院は彼に倦怠と憎惡とをもよほさせるばかりであつた。O homines ad servitutem paratos! (あゝ何と奴隸になりたがる人達であらう) とはチベリウスが當時の元老院に與へた有名な言葉である。けれども又一方

に於て峻嚴なりし彼を以て一片の人情をも忘れ果てた人非人の如く斷する人々は、この頃ローマに起つたカイウス・シラス *Caius Silanus* 事件の顛末 (*ib.*, III, 68—69) を再考すべきであらうと思ふ。兎も角、當時のチベリウス帝は凡ゆる點から推してローマ人にとり眞に善良な且つ賢明な皇帝であつたと言はれなければならぬのである (*ib.*, IV, 1, 6)。ところが此處に又もや不幸な事件が起つて、其處に宿命的な葛藤が再燃すると云ふことになつた。これ即ち A. D. 23 に於けるドルススの死であり (*ib.*, IV, 8)、この死によつてチベリウスはローマに於ける協力者を失つたばかりでなく、その反對黨との緩衝地帯をも失つたわけである。兎も角、ドルススの代りに選ばれたのは問題の人物セーヤヌスと云ふ一人の傑物であつた。セーヤヌスは人物も出來、才幹伎倆も兼ね備へ、チベリウスの厚い信用を受けてゐたのであるが、成上り者であつた爲に絶えず有力者の壓迫を受けてゐたのであり、今やこの人物がローマの管理者となるに及んで門閥をほこる貴族、とりわけアグリッピナ一派の策動と云ふものは猛烈を極めることになつた。その策動は先づドルスス毒殺の流言 (チベリウスとセーヤヌスを嫌疑者となす) に始まり、A. D. 24 に及んで黙過し難い勢力を備へ、内亂の恐れさへ生ずるに至つたのでセーヤヌスは終にその制壓を決意したのである。これより先、A. D. 23 セーヤヌスはローマの近衛兵を都市に近い一點に集結してその威力を一層有效ならしめ、これによつて帝權を一層強固ならしめ得たのであつた。さて *esse qui se partium Agrippinae vocent, ac, ni resistatur, fore plures; neque aliud gliscientis discordiae remedium, quam si*

*unus alterve maxime prompti subvertentur*—Tac. Ann. IV, 17 (アグリッピナ黨と自稱する一派がある。制壓せずんば其の勢力は擴大するであらう。秩序紊亂の行動に對する唯一の對策はその一、二の首謀者を削除するにある)と云ふセーヤヌスの意見から續々とその重要人物が擧げられて裁判に付せられ、處斷された。この事件が成立すると同時に、チベリウスの中には密告獎勵の傾向が強くなり、これが *Lex majestatis* と結ばれて最も殘虐悲慘な結果を將來すると云ふことになるのである。A. D. 15以降、曲りなりにも兎も角その目的を果して來た *Lex majestatis* は此處に恐ろしい武器の援助を得てその猛威を振ふことになり、*ante hac flagitiis, ita tunc legibus laborabatur*—Tac. Ann. III, 25 (曾ては惡に苦しんだ身が今はその法律に苦しむ)と云ふ結果になり、*sed dum veritati consultitur, libertas constituta* (これ正義を掲げたれど、自由を滅ぼせり)と後世の歴史家をして嗟嘆せしめた様な事情に立到つたのである (ib., I, 75)。少くともこれはチベリウスの政治的生涯にとつて最も致命的な打撃の一つであつた。けれども頽廢的な演技師の追放 (ib., IV, 14)、奴隸戰爭の鎮定 (ib., IV, 27)、カイウス・コミニウス *Caius Corninius* 事件の處斷 (ib., IV, 31)、堅實な對外政策 (ib., IV, 32, 36, 37)、リヴィヤ (ドルススの寡婦) の再婚に關する意見 (ib., IV, 40) 等を通じて見た當時のチベリウスは依然として天下の名君であつたと言はねければならぬ。ところが如何にも哀れなことにはチベリウスとアグリッピナとの間の宿命的な溝は輿論と共に次第に深くなるばかりで、終には食卓を共にすることさへも不可能になつて來たのである (ib., IV,

54; Suet. Tib., LIID)。A. D. 26 になるとチベリウスは再びローマを離れてしまつた (Tac. Ann., IV, 57)。時に年齢六十七、その原因を求むるもの、或はセーヤヌスの助言に歸し、或は彼の不調なる健康を説き、或は母リヴィヤとの衝突を想像してゐるが、何れも揣摩臆測に過ぎず、彼が口を鍼して物語らぬ以上、全くその理由如何は明白にし難いのである。兎も角、A. D. 27 彼は美しいカプリの島に渡つて其の地に起居することになつた (ib., IV, 67)。チベリウスに見棄てられたローマは此處に宛かも「禍ひの都」となれるかの如く相繼ぐ不幸に見舞はれ、大演技場の倒壊 (ib., IV, 62)、恐るべき未曾有の大火災 (ib., IV, 64) を生じ、其間には密告者が暗躍して人心動搖せる折柄 (ib., IV, 66, 68—70)、北方ゲルマニヤに於ける Frisii の叛亂が傳へられるなど (ib., IV, 72—73)、その社會生活は誠に慘めなもので、無能な元老院はこの一般的恐慌に直面してチベリウス、セーヤヌスの歸還を懇望したのであるけれども *non illi tamen in urbem aut propinqua* (二人ともローマは勿論、その近郊にさへも現れなかつた) ののである (ib., IV, 74; cf. Suet. Tib., XXXIX—XLID)。A. D. 29 にリヴィヤが死ぬと (Tac. Ann., V, 1)、チベリウスとアグリッピナの間には於ける葛藤は一層猛烈となり、あはや最も慘ましい悲劇が生れんとするまでに至り (ib., V, 3—5)、怪漢マクロ Mactro の出現を見、その恐ろしい反動の犠牲としてセーヤヌス一派が屠られると云ふことになつた (ib., V, 6—11)。一時的な擾亂から、このよき協力者を失つたチベリウス帝政の破端は今や拾收し難き困亂を呈し、チベリウスの政治的生涯もこれによつて全く致命的な傷を負ひ、彼の靜穩なるべき晩年も苦惱と悔恨と

絶望にさいなまれると云ふことになつたのである。 *divi me deaeque pejus perdant quam perire me quod odio sentio* (あゝ神々よ、余が毎日に滅び行くを思ふより、更に惨めに余を滅ぼし給へ)とは當時のチベリウスの呻吟であつた (*Ib.*, VI, 6; *Suet. Tib.*, LXVI-LXVII)。此處に密告者の制度は凡ゆるものを破壊し盡したのである。セーヤヌスが斃れ、セーヤヌスの敵も亦斃れ、チベリウスの舊友も相繼いで斃れ、無数のものが罪を受け、自殺するもの數を知らず、宛ら恐怖時代を出現した。A. D. 33にはアシニウス・ガルス、アグリッピナとドルススの母子、コツケイウス・ネルヴァ *Cocceius Nerva* が何れも餓死し、冷い輿論を前にしてピソの妻プランキヤの自殺もあつた。A. D. 34には一種の反動として密告者の上にも處罰があつた (*Tac. Ann.*, VI, 30)。かくて其の恐怖の政治は A. D. 37 彼が七十八歳で死ぬまで續いたわけである (*Ib.*, VI, 50—51; *Suet. Tib.*, LXXIII)。然しながら此の間、彼の政治が密告による告發とその斷罪にのみ終始したわけでは決して無いのであつて、例へば A. D. 32 に於ける穀物の價格統制 (*Tac. Ann.*, VI, 31)、A. D. 33 に於ける高利取締 (*Ib.*, VI, 16)、財政改革 (*Ib.*, VI, 17)、A. D. 36 に於けるローマ大火罹災者の救濟等見るべきものも相當多いのであるが、これ等のものを全く蔽ふて餘りある程、その恐怖の陰影は強いのである。然しながら彼の晩年が放蕩三昧の獸的生活に過されたとする説 (*cf. Suet. Tib.*, XLII—XLV) の如きは凡ゆる點から見て全く一つの無價値な巷説であり、彼の自負と潔白とはコツケイウス・ネルヴァに對する言葉 (*Tac. Ann.*, VI, 26) の中にも充分これを窺ふことが出来るのである。放蕩説にはチベリウ



スの年齢から見ても相當の無理があるばかりで無く、彼の生涯を彩る性格、行爲の上から見ても可能性が無いのであつて、もしこれが事實とすれば彼はその晩年に於て一人の狂人に過ぎなくなるのであり、一層歴史的批評に價しない結果になるのである。それは兎も角、彼の晩年は實に慘めなもので「人類の中で最も陰鬱なる姿」と評した大プリニウス Plinius の言葉には恐ろしい眞理がひそんでゐるわけである。

A. D. 14 に即位してより、その治世二十三年間、チベリウス帝政は概してローマに忠實であつたと言はれなければならぬ。チベリウスとローマ市民との間には相互に宿命的な嫌惡がつつて行くばかりであつたが、多くローマ古來の傳統を墨守したチベリウスの政策は大體に於て失策が無く、陰慘な家族的葛藤を除けば、一般民衆は安易な生活と活潑な商業とによつて未曾有の繁榮を來し、國庫の統制は課税を輕減し、法律と習慣は嚴格に遵守せられ、穩健な對外政策は著しい成功をもたらしたと見なければならぬのである (cf. Suet. Tib., XXX—XXXVII)。

按ずるに彼の惡評は(一)家庭的不和、(二)カプリの放蕩生活、(三)セーヤヌスの暴政、(四)密告者の活躍等に起因するものである。この中、(二)效蕩生活は前述の如く全く問題にする價值も無いのである。他の三者に至つては之を思ふ時、何人もチベリウスの宿命的な生涯を、即ちその家庭的社會的傳統の重荷に打ちひしがれた不幸な人間の一生を哀れまらずにはゐられないであらうと思ふ。蓋しチベリウスの帝政時代は

社會的變遷が最も激しく行はれた時代であつた。少くとも外見上、飽和した大帝國が必然の結果として内部的に重要な變革を見なければならぬ時代であつた。新舊勢力のめざましい葛藤が社會の根底をゆすぶつてゐた時代である。この様な時代には屢々人類は幾多の到底解決し難き問題を強ひられるものである。即ち彼等は何うしても必要な而も不可能な仕事を餘儀なくさせられるのである。かかる時代には内外の生活にただ紛糾が生ずるばかり、憎惡は往々にして分つべからざる人々を分ち、同情は屢々闘はざるべからざる人々を組合はせる、凡ゆる觀念が錯雜して、試みと云ふ試みは盡く奇妙な慘ましい結果を生む、善惡のけじめがつかなくなり、その取捨に迷ふ場合が多く、とりわけ女性がその哀れな悲劇の役割を幾度か強ひられるのである。これ實にアウグスツス一黨の悲劇であつた。そしてその中心をなすべき人物としてチベリウスはその慘ましい生涯を七十八歳まで送らなければならなかつたのである。彼の有つ長所は時代の激浪にもまれて屢々短所となつた。即ち儉約は悒悒となり、消極は無爲となり、峻巖は苛酷となり、確信は殘忍となつた (cf. Suet. Tib., XLVII-IXV)。彼は凡ゆるものに生殘つて社會の爲に苦闘し、而もその社會から憎惡嫌厭されて此の世を去つたのである (Ib., LXXXV)。人の力では如何ともし難い斯うした環境と傳統の力が、一人の英雄に落ちかかると屢々人類史は悲劇を物語るものである。チベリウスの悲劇もその一つであつた。その不幸な生涯を豫言するものの如く、チベリウスはその登位の年にあたつて不吉な言葉を殘した。

*Cuncta mortalium incerta quantoque plus adeptus foret,*

*tanto se magis in Lubrico.*

チベリウス帝政に關する主要な史料はタキツスの *Annales* とスエトニウスのチベリウス傳である。タキツスの *Annales* はチベリウスの死後八十年にして書かれたものである。タキツスの書はチベリウスに對する惡意と憎惡とに充ち溢れてゐる。彼の偏見は皇帝の最も善良な行爲に對してすら惡辣な動機を求めするのである。それ故、タキツスの描くチベリウスの映像はタキツス自身の陰鬱な苛酷な想像に基くものが多いわけである。歴史であると同時に諷刺であるこの物語の中から、我々は事實と想像とを分析しなければならぬ。スエトニウスの書も同じ頃のものであるが、これは一つの寶の山に過ぎない。まがひ物を無視して吾人は價値ある寶だけの中から拾ひ取るべきである。ヴェレイウス・パテルクルスはこの二者よりも古いのであるが、然しその書は一つの頌徳表であるから、またそれだけの取扱ひしか出來ぬわけである。またデオン・カシウスほど時代が下ると、敢へて筆者の手腕を問題にしなくとも全く材料が不純になるので、せいぜい參考にすること位にしか役に立たない。

(一九三四・五・二四夜)